

The Book of MINO —美濃焼の解剖—

美濃焼の本が完成間近です。



【The Book of MINO —美濃焼の解剖— とは？】

1,400年に及ぶ歴史を持つ美濃焼は、陶磁器の原料となる良質な「土」が豊富に採取できることが発展の礎となり、釉薬や技術の開発が進み、食器を始め、タイル、アート作品等のやきものが誕生し、様々なシーンで利用され、生活に溶け込んできました。

現在制作している本は、セラミックバレー協議会とグラフィックデザイナーの佐藤卓さんとの出会いから生まれた、14年以上に及ぶプロジェクトです。セラミックバレー協議会の発足と活動は、美濃焼が持つ深い価値を再確認し、地域・文化の活性化を目指す取り組みとして始まりました。

2012年の卓さんとの出会いから、美濃焼の産地の課題を見つめ直し、セラミックバレーのロゴマークが誕生。

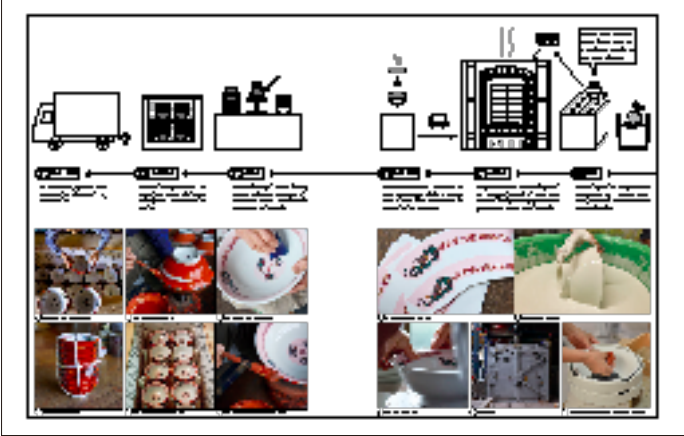
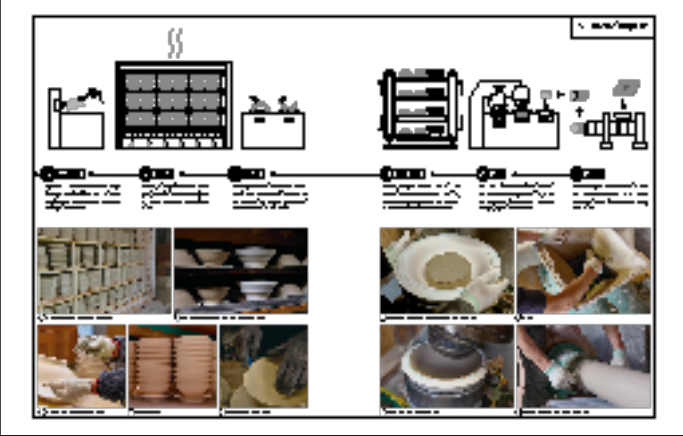
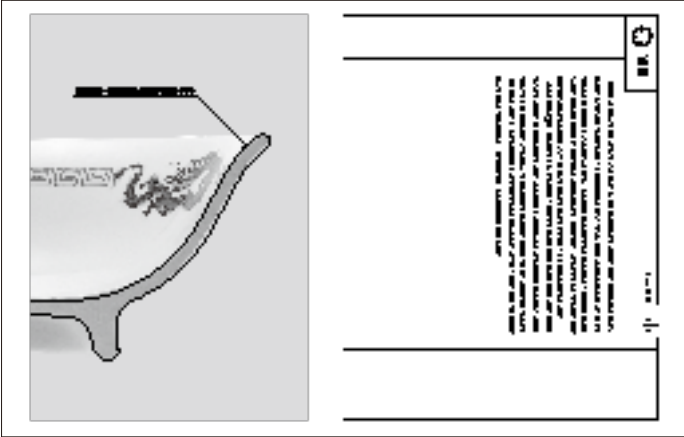
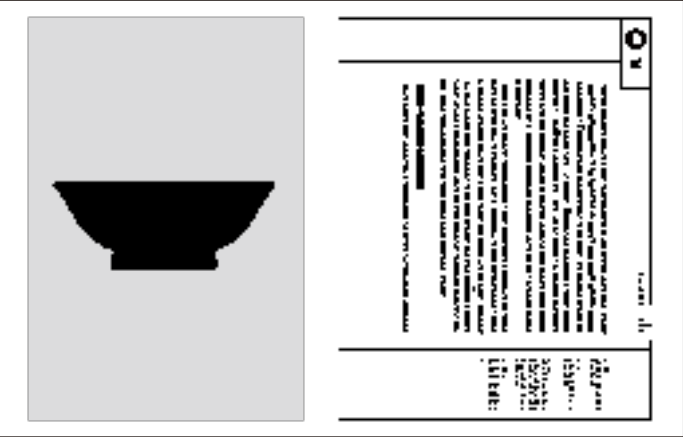
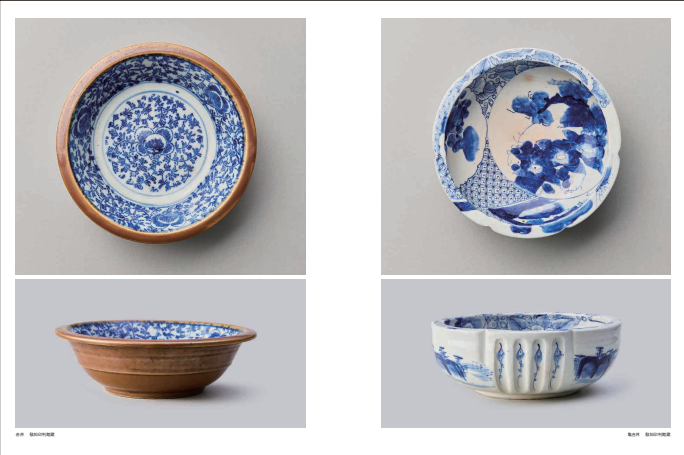
映像制作、LA・サンパウロでの「Exhibition: The Art of the RAMEN Bowl（美濃のラーメンどんぶり展）」、当地で行われるクラフトフェア「セラミックバレー クラフトキャンプ」の開催を経て、いよいよ美濃焼の持つ価値に光を当てる本の制作へと発展しました。（一昨年（2024）は当地でのアートプロジェクト「土から生える」や、昨年（2025）には東京 21_21 DESIGN SIGHT での「ラーメンどんぶり展」も開催）

本の中では、ラーメン丼やマグカップ、お茶碗、洋皿などの一般に馴染みのある器の解剖に始まり、そこからタイルへ。その後、陶芸・アートの世界へと広がります。美濃焼の歴史、産地ごとの特徴にも触れていき、最後はやきものに欠かせない「土」、その土という宝物を美濃焼の産地にもたらせてくれた東海湖に行き着きます。伊勢湾北部から濃尾平野にかけて、650万年前には存在していたという湖で、そこに堆積した粘土が、美濃焼の上質な土の起源です。

美濃のやきものの製造にまつわる道具、技術、職人の皆様から、世界でも有数の産地となった美濃の歴史や環境、多様性を表現した“美濃焼曼荼羅”に至るまで。この一冊に、これまで明かされることのなかった美濃のやきものの魅力が凝縮されています。

ラーメン丼の解剖

美濃焼の解剖を試みるにあたり、本書ではまずラーメン丼の解剖から始める。ラーメン丼は多くの日本人になじみがあり、誰もが共通したイメージを抱ける器であるからだ。また日本のラーメン店で使われているラーメン丼の約90%が美濃焼産地で生産されており、美濃焼を代表する器の一つといえるからである。とはいえラーメン店にいる客のうち、そのラーメン丼のほとんどが美濃焼であることを知る人は一体どのくらいいるのだろうか。美濃焼産地の中でも、ラーメン丼を産するのは土岐市駄知地区だ。岐阜県陶磁器工業協同組合の記録によると、1956（昭和31）年の市況で「駄知地区の中華ソバ丼」の生産販売体制強化を図ったところ、成果が上がった旨が記されている。当時、ラーメンは中華そばと呼ばれた。戦後、米不足にあえぐ中、米国から小麦粉が大量輸入されたことで中華そばが屋台などで安価に提供され、庶民の空腹を満たす食べ物として一気に広まったことがうかがい知れる。この頃から駄知地区はラーメン丼の一大産地となった。

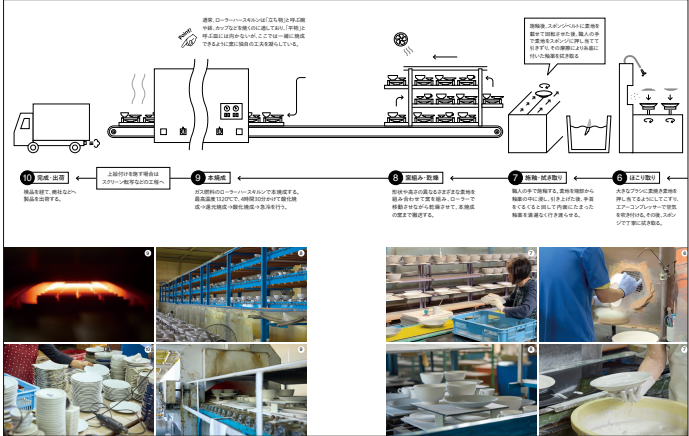
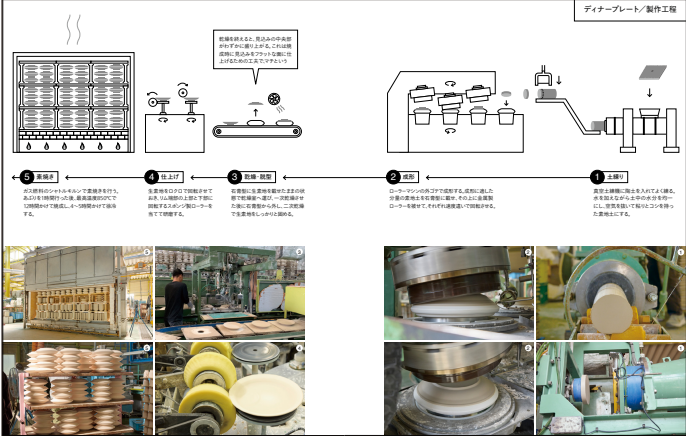
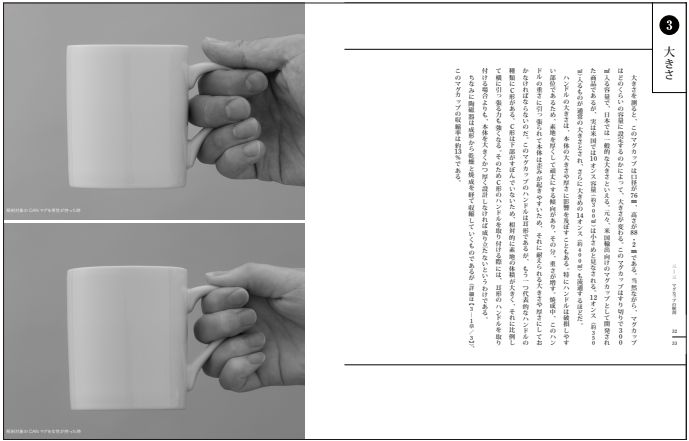
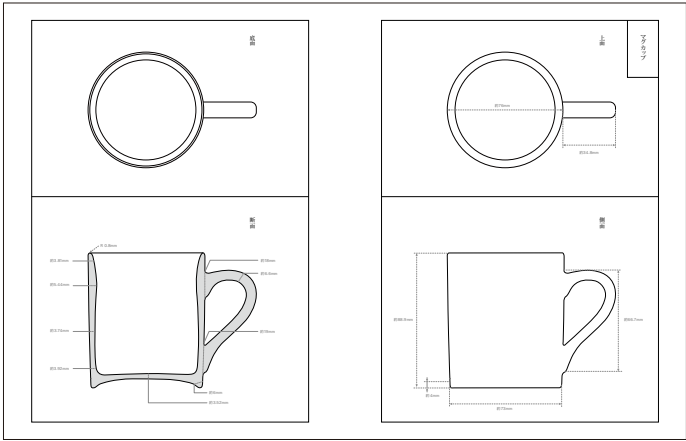
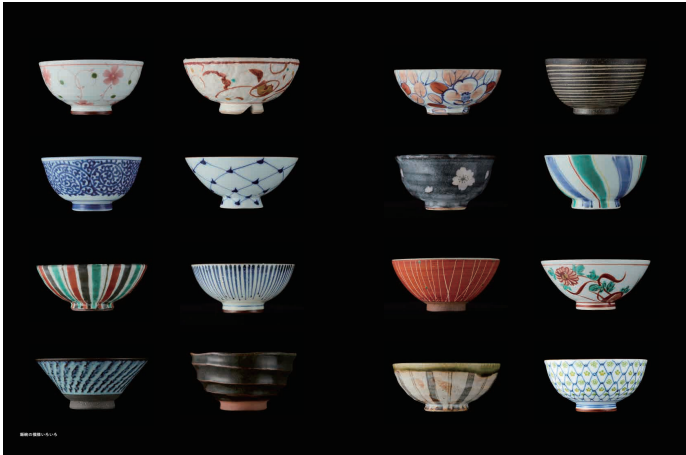


器の解剖

美濃焼とは

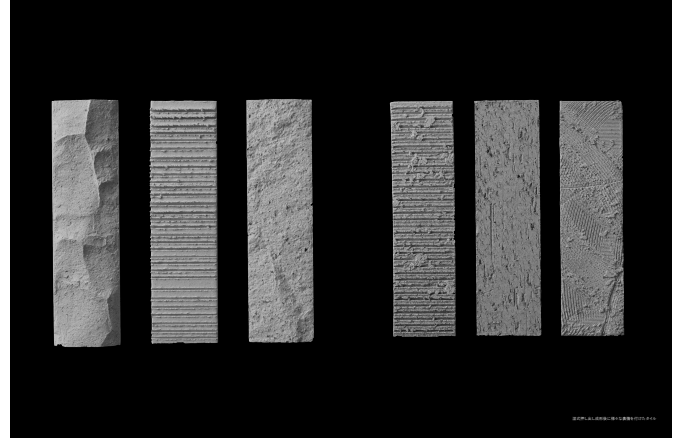
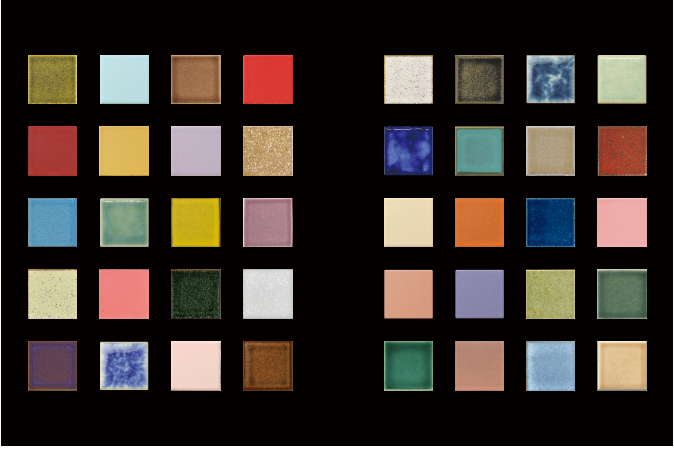
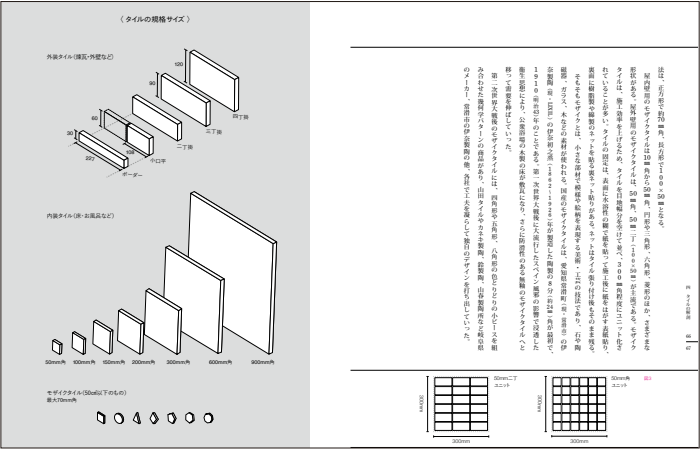
美濃焼というと、一般に何を思い浮かべるだろうか。志野や織部に代表される伝統的工芸品がよく知られているが、実はそれらばかりではない。工場で大量生産される外食産業用をはじめ、家庭用、ギフト用、輸出用の飲食器、少量生産の伝統的工芸品や手工艺的な作品、一点物の陶芸作品やセラミックアート、タイル、工業部品として使われるニューセラミックスまで、広範な分野の陶磁器全てが美濃焼なのである。その混在ぶりから「美濃焼は特徴がないことが特徴」と表現されることもあるが、すなわち多様性に満ちた産地と換言できる。これは国内最大の生産量を誇る陶磁器産地ゆえの特徴だ。

本書では、美濃焼とは岐阜県東濃西部に位置する多治見市、土岐市、瑞浪市を中心に、その北西側に接する可児市、南東側に面する恵那市南西部（旧・明智町、旧・山岡町）で産する、あるいは過去に産した陶磁器全般と定義する。



タイルの解剖

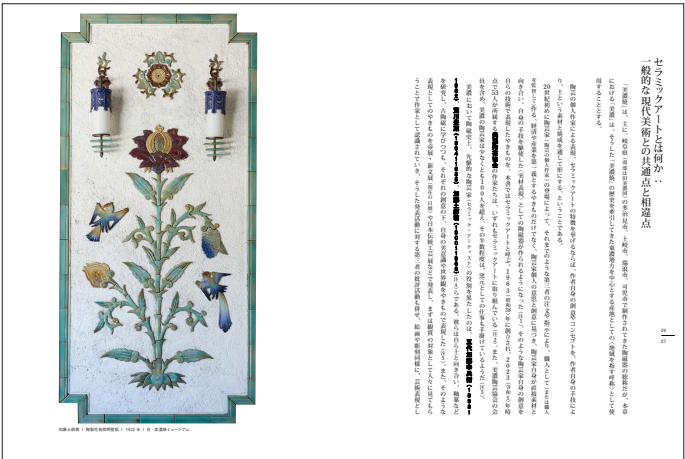
1922 (大正 11) 年 3 月 10 日から 7 月 31 日の期間に、東京の上野で「平和記念東京博覧会」が開催された。第一次世界大戦の終結を記念してのことだ。このとき、東京タイル業組合が内外装にタイルをふんだんに用いた「タイル館」を特設館として出展し、4 月 12 日に全国のタイル業者を集めて大会を開いた。議題の一つとして挙がったのがタイルの呼称についてだった。当時、敷瓦や化粧煉瓦など、建築の表面仕上げ材としての陶磁器に対して、およそ 25 もの表現があり、流通に支障を来していたという。その解消を目的に、名称を「タイル」と統一することを決議したのである。ただしそれまでの呼称では、壁や床といった使用部位や用途がおおよそ読み取れたが、タイルと統一することで不明確になるという弊害もあった（ちなみに、タイルの英語表記は tile。「覆う」を意味するラテン語の tile tegula が由来といわれ、屋根・壁・床に張るものを指すが、日本では屋根は含まれない）。日本標準規格 (JES) 制定のための工業品規格統一調査会が大会の前年に設立されたばかりで、名称統一の決議後もしばらくは、建築学会の標準工事仕様書 (1923 [大正] 12 年) や『建築土木資料集覧』 (1926 [大正 15 / 昭和元] 年) などでは、敷瓦や化粧煉瓦という呼称も使われていた。1929 (昭和 4) 年になって、国家規格としてタイルの形状や寸法について定めた (JES 第 9 号) ことで、ようやく建築材料としてのタイルという名称が確立したのである。



美濃のセラミックアートを解剖する

セラミックアートとは何か：一般的な現代美術との共通点と相違点

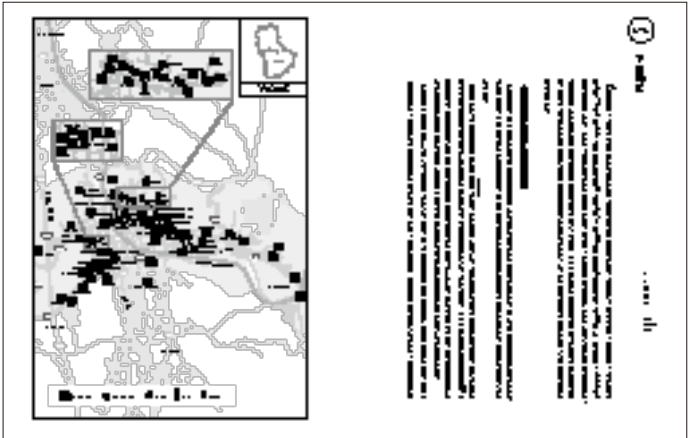
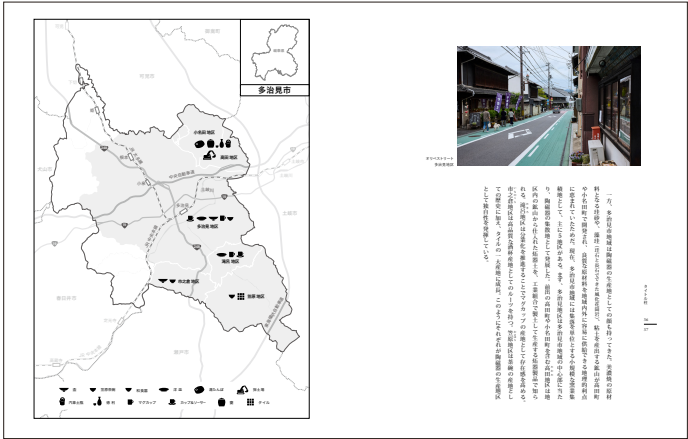
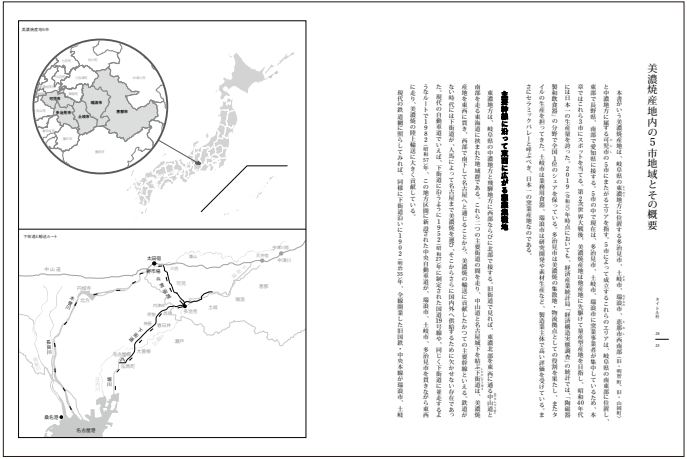
「美濃焼」は、主に、岐阜県（南部は旧美濃国）の多治見市、土岐市、瑞浪市、可児市で制作されてきた陶磁器の総称だが、本章における「美濃」は、そうした「美濃焼」の歴史を牽引してきた東濃地方を中心とする産地としての〈地域を指す呼称〉として使用することとする。陶芸の個人作家による表現、セラミックアートの特徴を挙げるならば、作者自身の創意やコンセプトを、作者自身の手技により、土という素材と焼成を通して形にする、ということである。20世紀初めに陶芸家（陶芸の個人作家）の登場によって、それまでのような第三者の注文や指示により、職人として（または職人を監督して）作る、経済や産業を第一義とするやきものだけでなく、陶芸家個人の意思と創意に基づき、陶芸家自身が直接素材と向き合い、自身の手技を駆使した〈実材表現〉としての陶磁器が作られるようになった。そのような陶芸家自身の創意を自らの技術で表現したやきものを、本書ではセラミックアートと呼ぶ。1963（昭和38）年に創立され、2023（令和5）年時点で53人が所属する美濃陶芸協会の作家たちは、いずれもセラミックアートに取り組んでいる。また、美濃陶芸協会の会員を含め、美濃の陶芸家は少なくとも100人を超え、その半数程度は、窯元としての仕事も手掛けているようだ。



産地・セラミックバレー

美濃焼産地内の5市地域とその概要

本書がいう美濃焼産地は、岐阜県の東濃地方に位置する多治見市、土岐市、瑞浪市、恵那市西南部（旧・明智町、旧・山岡町）と中濃地方に属する可児市の5市にまたがるエリアを指す。5市によって成立するこれらのエリアは、岐阜県の南東部に位置し、東部で長野県、南部で愛知県に接する。5市の中で現在は、多治見市、土岐市、瑞浪市に窯業事業者が集中しているため、本章ではこれら3市にスポットを当てる。第2次世界大戦後、美濃焼産地は他産地に先駆けて量産型産地を目指し、昭和40年代には日本一の生産量を誇った。2019（令和元）年時点においても、経済産業統計局「経済構造実態調査」の統計では、「陶磁器製和飲食器」の分野で全国1位のシェアを保っている。多治見市は美濃焼の集散地・物流拠点としての役割を果たし、またタイルの生産を担ってきた。土岐市は業務用食器、瑞浪市は研究開発や素材生産など、製造業主体で高い評価を受けている。まさにセラミックバレーと呼ぶべき、日本一の窯業産地なのである。



美濃焼の土

陶磁器の産地として名高い美濃。岩肌あらわに、深く掘り下げられた大地からは灰白色や淡褐色が見え、足元は白色で、ざらりとした結晶粒のような感触が靴底から伝わるような土地である。その場所は、岐阜県の東濃地方にある採掘場。白亜紀に生成された花崗岩を母岩とした粘土 鉱 床だ。木片が炭化して分解が進み、黒い粒が露出しているのが時折見られる。これが粘土に含まれる有機物である。大きな採掘場の辺縁部には赤松が生い茂っている。この土地が隆盛を誇ってきた背景には、自然の恵みがあった。原料となる土、燃料の赤松、そして水 ― 豊富な資源があってこそである。この特異な環境にあった美濃焼産地のポテンシャルを土から解き明かしたい。

粘土鉱物の結晶構造

● 酸素原子 (O)²⁻ ● 水素原子 (H)⁺ ○ 水素原子 (H)⁺
● アルミニウム原子 (Al)³⁺

結晶の構造単位 Si-O 四面体

200nm 200nm

Al-OH 八面体

200nm 200nm

カオリナイトの結晶分子の結晶構造

200nm

基本層 (酸素原子と水素原子からなる四面体の層) → 基本層 (酸素原子と水素原子からなる四面体の層) → カオリナイトの結晶分子

カオリナイトの結晶の形

カオリナイトの結晶分子 → 結晶の形

▲ 土質

粘土は、主にシリカとアルミナを主成分とする。その結晶構造は、四面体と八面体の層状構造からなる。この層状構造は、水分子や有機物を吸着し、膨潤性を示す。また、粘土の粒子は非常に小さく、表面積が大きい。そのため、染料や顔料の吸着に非常に有効である。美濃焼の土は、この粘土の特性を活かし、独特の質感と色合いを実現している。

10 完成品出荷

9 乾燥・焼成

8 窯出し

7 フィルタプレス脱水

6 原料

10 完成品出荷

9 乾燥・焼成

8 窯出し

7 フィルタプレス脱水

6 原料



【書籍の目的】

- ①美濃焼が有する文化、歴史、技術、経済、地域特色を再整理、再評価、再定義する
- ②美濃焼産業の中で生まれた創意工夫や研究開発の成果、完成した製品や作品の卓越性や独創性を、デザインの視点から浮かび上がらせる
- ③本書籍を制作することで浮かび上がる貴重な情報を、美濃焼の製品開発や普及に活用する
- ④美濃焼産業を、持続可能な産業として、発展・進化させ、地域社会の未来の創出に貢献する

【書籍の魅力】

- ①日本を代表するグラフィックデザイナー佐藤卓氏による「デザインの解剖」手法を採用し、美濃焼をこれまでにない切り口で紹介
- ②美濃焼の歴史を、650万年前の東海湖から近現代までの激動の盛衰を約1,400頁に網羅
- ③圧倒的な情報量と網羅性、ビジュアルは、美濃焼のみならず、地域の歴史本にもなりうる必携の書籍

【書籍の活用方法】

この書籍を通じて、あらためて陶磁器からタイルまで、幅広く奥深く美濃焼についての知見を深めることで、自社の営業力やブランディングなど、業績向上に役立てることができます。

- ①営業トークや販促コピーライティングのレベルアップのツールとして
- ②美濃のやきものの価値を組織内に伝え浸透させる教育ツールとして
- ③書籍のコンテンツを、店頭プロモーションや展示会でのディスプレイ素材として
- ④取引先へのお中元、お歳暮などの販促ギフトとして
- ⑤実店舗やECサイトでの販売商品として

セラミックバレー協議会では、書籍をテキストとした美濃焼を知るセミナーの開催を予定しております。

